# 大伴小だより

富田林市立大伴小学校　令和３年４月３０日（金）５月号

## 出会いと別れ　～「慣れる」ということ～

校長　堤　周作

新型コロナウイルス感染拡大について変異種の影響なのか、大阪府はこれまで２度の緊急事態宣言が発出時より深刻です。富田林市内や本校においても同様であり、本校でも新年度早々に、予定していた行事の延期や変更を余儀なくされています(4/13付配付済)。保護者の皆様には、本校の葛藤や試行錯誤した上での決断について、今年度もご理解を頂けますとありがたいです。

そんな中、４月８日の赴任式・1年生対面式と、９日の離任式は、密を避けるため低学年と高学年の２回に分けて距離を取り対面形式で実施しました。子どもたちは、新たに赴任された８人の先生たちの大伴小への期待の挨拶に目を輝かせ、離任される７人の先生たちの大伴小との別れへの思いを聞いて、神妙な面持ちで涙を浮かべていた人も多かったです。この２日間の子どもたち一人ひとりの表情がとても印象で、社会には出会いと別れがあることを実感したようでした。昨年度は長期にわたる休校により、このような式を実施できなかったのですが、今年度は分散開催ではあったものの対面で直に先生たちの思いを聞けたことは、教育的な意義があったと考えています。

※入学式、赴任式・始業式・対面式、離任式等の様子は、大伴小HP内の「大伴小ブログ」でご覧いただけます。パスワードは、「　　」です。ブログは随時、更新しています。

もちろん、子どもと教職員のみならず、子どもたち同士でも出会いと別れがありました。しかし本格的に始まった子どもたちの授業や休み時間の様子を見ていると、一生懸命に新しい友だちや先生とつながっていこうとする意志が感じられます。学校が全体的に、昨年度末とは子どもたちの姿勢や目つきが違っており、自動的に１学年上がるだけではなく、心も態度も行動も１つ成長し、頼りがいのある人になりつつあるように見えます。個々で差はありますが、学校全体としてはいいスタートを切ったように思います。

さて、別れと出会いは、児童の成長にとって欠かせないものであり、教職員にとっては最大の研修であると言われます。とは言っても、当事者はやはりプレッシャーがかかるものです。全ての子どもたちや転出入された先生たちには、それぞれの学級や職場（学校）に早く「慣れて」ほしいと願っています。

ところで、「慣れる」とは、経験を重ねて様々な対応に習熟することですが、この説明だけでは抽象的すぎて実感を伴いません。そこで、「慣れる」を「着慣れる」という言葉に置き換えて、その過程を具体的に思い描いてみます。

新しい服は、肌触りが“ごわごわチクチク”して着心地が良くないことがありますが、しばらく着ているとそうした不快感が解消されて着やすくなる、それが「着慣れる」です。この“ごわごわチクチク”の原因である直線的な繊維の出っ張りは、着る回数を重ねる度にだんだんと引っ込んだり丸まったりして突起が目立たなくなり、肌を刺激する強さや回数が減ってきます。

国語辞典によると、「慣らす」と、凸凹をなくして平らにすることの「均す」は、もともと同じ言葉と考えられるそうであり、それならば、「慣れる」という言葉も「突起がなくなる」というイメージでとらえてもいいでしょう。

ただ、私たちが服を「着慣れる」ときは、“服が私たちの身体に合わせて繊維の突起をなくしてくれる”のですが、人が組織（学級等）に「慣れる」ときには、“両者が相手の突起を受けとめられるようになる”と考える方が正確でしょう。個人は相手の習慣への対応を身に付け、相手の側も新たに知り合った人への対応を獲得する、という二つの変化が起きています。

子どもたちは新しいクラスで、新しい友だちの様々な「突起」をうまく受けとめる「へこみ」を自分の中に作る、と同時に、新しい友だちも「突起」をうまく受けとめる「へこみ」を設ける。それが繰り返された結果、どちらも「突起」のせいで肌が刺激される不快感“ごわごわチクチク”を感じなくなる、それが「慣れる」ことだと考えます。だから、よく言われる「慣れるまでが大変」という言葉は、両者が自分を変えなければならないのだからまさにその通りです。

でも、「慣れる」ことには、うれしい贈り物がついてきます。「着慣れた」服は古くなって捨てがたいもの。それは、私たちが「突起を感じない服」をまるで自分の身体の一部のように感じ、深い愛着を抱くからです。「慣れる」ということは、単に不快感が消えるだけでなく、自分という肉体を超えて広がったような心持ちを産みます。そのようにして、子どもたちも教職員も学校も一回り成長し、一生の思い出がつくられていくのだと思います。

**「大伴小の子どもたち、大伴小を転出入した教職員の皆さん、『慣れる』まで気を遣い大変だろうけど、自分のペースで頑張って！」**と、心の中でつぶやきながら、子どもたちや先生たちを日々、眺めています。

【参考・一部引用】東邦出版：「日本の言葉の由来を愛おしむ」高橋こうじ著